

歸木蓬生

Hahakigi Hoseri

菰回薇窓



常木蓬生

Habakigi Hōsei

菫回薇窓





薔薇窓^{ばらまど}

二〇〇一年六月一日 発行

著者^{はき} 木蓬生^{きはらせい}

発行者 佐藤隆信

発行所^{株式} 新潮社

〒162-8711 東京都新宿区矢来町七一

電話^{編集部} 〇三—三六六—五四二
読者係 〇三—三六六—五二二

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小
社読者係宛お送り下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

© Hōsei Hahakigi 2001, Printed in Japan

ISBN4-10-331410-9 C0393

薔
薇
窓

La Rosace

「もう春ですよ、先生」

御者台からわざわざ降りてきたジェラールが、花市場の前に並ぶチュエリッブを指さした。

「チュエリッブは半月前から咲いていた。ジェラルルのところは春が遅いのだね」

私は一フラン銀貨を渡しながら皮肉った。

ジェラルルの馬車は週に二回は利用するが、もともとが無口で、「こんなにいいのですか。良い一日を」と、チップをはずんだときに答えるくらいだ。シテ島の手前のセーヌ河岸でわざわざ馬車を停めさせたのはつい前の週で、プラタナス並木の緑を眺めるためだった。刈り込まれて冬の間黒々としていた枝に、ほんの少し緑がさし始めたのが三月半ばで、半月の間にそれとはつきり分かるくらいの緑のヴェールになってしまった。

鉄骨とガラスでできた花市場にいたっては、だいぶ前からチュエリッブの他にも薔薇や撫子、桜草、クロッカス、百合などがもう花をつけていた。

「すみません。おつむがのろいと春も遅いようで」

ジェラールは御者台上がって帽子をかぶった。馬に鞭を入れながら「春ですな」と叫び、私を見や

つてニツと笑う。

花屋の植木鉢のチューリップは背丈が十センチくらいだろうか。それでも赤い大きな蕾をつけている。まだ客はちらほらで、花屋のおかみが温室の中にはいるよう勧めてくれたが断った。もとはといえばテュレンヌ通りから歩いていては遅刻するので、馬車に乗ったのだ。

裁判所の脇にサント・シャペルの尖塔が見える。糞虫を真中で切つて立てた形をしている。外側と内部が全く異なる建物の代表だろう。あの礼拝堂には何度行つても倦きることがない。

歩き出すと、微風にどこことなくふくらみが感じられた。

警視庁北門の守衛がこちらを見て、さつと気をつけの姿勢をとった。そんな動作をするのは警部以上のお偉方だけなのに、上層部から通達が行っているのか、特別医務室に勤める医師にも同じ待遇をしてくれる。悪い気持はしない。今日も一日働くぞという気構えにはなるからだ。

中庭を渡るとき、微かな匂いがした。植え込みにひよる長く薔薇が伸び、一輪だけ白い花をつけていたがその匂いではない。立ち止まり、足元を見て驚いた。水仙がいつの間にか二十センチほどに生長して、黄色の花を二つつけているのだ。紛れもなく水仙の匂いだ。深呼吸をしながら香をかいだ。

奥の階段を二階まで駆け上がって木の扉を押す。

ラバトー夫人が待ち構えていたように立ち上がる。

「ガルニエ先生は今日もお休みだそうです。さきほど連絡がありました」

「悪いのだね、持病が」

「たぶん、そうでしょう」

ラバトー夫人は深刻な顔をした。

ガルニエ医長が欠勤すると、ひとりで全部の病人を診なければならず、忙しくはなる。忙しさは苦にならなかったが、診断の難しい病人に出食わしたときに相談できないのが心細い。

ラバトー夫人のほうは、十五年近くも仕えている上司が不在のとき、亭主に死なれたように元気がな

い。この常勤になつて三年にしかならない私の存在など、まだ無きに等しいのだ。それでも、この一年で、少しは頼りにしてくれるようになった。

「少し遅れましたね、ラセーグ先生」

山高帽を棚に置き、下のハンガーにフロックコートを掛けていると後ろから訊かれた。

「すまない、寝坊した」

「また写真なのでしよう。夜遅くまで現像をして」

「まあね」

凶星だつたがお茶を濁した。

「ペロー警部から連絡がはいっています。昼頃こちらに見えるそうです」

「用なら、私が行つてもいいのに」

「いえ、あの方のことですから、こちらに降りて来られると思います」

自室に入ったとき、中庭と同じ匂いがした。机にリモージュ焼の花瓶が置かれて、白水仙が二輪活けてあつた。

「ありがとう。もう春なんだね」

言い終えて、ジェラルルの科白だったことに気がつく。

「うちのベランダにもう十株ばかりが花をつけていましたよ。春の香です」

ラバトー夫人は片目をつぶってみせる。

廊下を急いで、つき当たりの階段を地下まで降りた。さすがにここまでは春の兆しは届かず、いつものようにかび臭さが鼻をつく。

「お早う。今朝は何人だね」

直立不動の姿勢をとつたフォヴィル巡査に私は訊いた。

「三人です、先生。女性が二人、男性が一人」

フォヴィル巡査は言い終えたあと、ピンと張った口髭を片手で撫で、収容者名簿をさし出す。
 フィリップ・ヴォアザン（男、五十一歳）、住所不定、スフロ通りで通行人にからんでいるところを保護、収監。

ナタリー・テレサ（女、年齢黙秘、三十二、三歳か）、ブルターニュ通り十三番地、ろうそく店の窓ガラスを洗濯棒で割ったあと、店の女主人を負傷させた。支離滅裂の言動あり。

オットー・ヤッコ（女、十五、六歳か）、住所不定、呪文のようなものを小声で唱えながら、ヴォジラル通りの暗がりにはやがんでいた。近所の住人が通報。

「この最後の女の名は確かなのか。女でオットーなど珍しい」

「実は、それが名前かどうか判らないのです。フランス語をしゃべらないもので——」
 「フランス語でなければ、何語をしゃべるのだい」

念のため訊いてみる。イタリア語とスペイン語なら何とか操り、アラビア語とドイツ語、英語であっても用足しできるぐらいの自信はあった。

「皆目見当が付きません」

フォヴィル巡査はにこりともしないで首を振った。診察でそれを突きとめるのがあなたの任務ですと言わんばかりの目つきだ。

「よしこの順序でいい。連れて来なさい」

フォヴィル巡査に命じて机の方に行き、椅子に腰かけて待った。

部屋は見事なまでに何も無い。大きめの机と肘かけ椅子のみ。右の壁際に診察用の寝台を置き、布を張った衝立で遮っていた。

机の上にも何も置いていない。坐っている位置から入口の扉が直視できた。机の前の木椅子まで距離にして十メートル。その間が診断の勝負だった。

扉が叩かれて開くのを、私はじっと眺める。

男は赤ら顔で、足を広げたおぼつかない歩行だ。私のほうを見て愛想笑いをした。髭は伸び、頭もくしゃくしゃで、茶色のズボン、灰色の上着もよれよれだった。右の皮靴の先が割けている。

「額の傷は？」

右眉の上が紫色に腫れ上がっていた。

「分かりません」

男は首を振る。

「独房の中で倒れたという記録があります」

フォヴィル巡査が日誌を私に示した。短い記述で、どういう倒れ方をしたかは書いていない。

「よく倒れるのかね」

私は席を立てて男の傍に寄った。まだ酒気が残っていた。

「時々倒れます。あつしは覚えてないんですが、みんながそう言うもんで」

「そんなとき、けいれんは起こらないのか」

「起こるようです」

「怪我もそのときするんだね」

「へえ、ときどき」

私は男の衣服の汚さに閉口しながらも、胸元をはだけ、クモ状になった小血管をいくつも確認する。

同じような赤味は男の鼻にも頬にも見られた。念のために両方の手掌も広げさせた。爪が伸び、泥まみれの手だが、手掌紅斑が認められる。

「ヴォアザンさん」

私から名前を呼ばれて、男は目を見開いた。

「はい」

何か宣告でも待ち構えるような表情だ。

「このままアルコールを飲み続けると、あと五、六年の命だよ。アルコールの切れがけのてんかんで川の中に落ち、そのままの世行きになるかもしれない」

私は席に戻って日誌に書き入れる。〈酒精中毒、離脱てんかん。精神病院収容の必要なし〉。

「からまれた通行人から告訴状は出ているのかね」
横に控えているフォヴィル巡査に訊いた。

「いえ、出ておりません」

「だったらこのまま帰していい。何度も検束されるようになれば、病院に送らないといけないがね。いや、いずれそうなるだろうね」

無事放免と知って、男は何度も私に礼を述べた。しかし彼がこの恐ろしい病から逃れることは、もう不可能だろう。どこへ行っても影のようにつきまとい、その暗い影が生身の人間を呑み込んでしまうのだ。蟻地獄——。

「ヴォアザンさん」

扉から出ようとしていた男に私は呼びかけていた。男は驚いて後ろを振り向く。鼻頭が赤かった。さつきとは正反対の宣告をされるのではないかと恐れる目つきで私を見る。

「アルコールはもうやめるように」

私は指を立てて言った。

「へい、それはもう、お約束できます」

男は安堵し、神妙に答えた。

扉が閉まるのを見つめ、言わずもがなだったと私は反省する。男にひとつ余計嘘をつかせる結果になったに過ぎなかった。

廊下で女の声があった。昨夜からの興奮がおさまっていないのか、ひと眠りしてまた元気を取り戻したかのどちらかだ。扉を開けてやる。

「放してちょうだい。こんなに縛りつけなくても逃げたりしないのだから」

「いや、またその爪で引っかかれたらたまらん」

フォヴィル巡査がなだめながら女を椅子に坐らせる。

「いいからその縄、ほめてやりなさい」

私は彼女の身体が自由になるのを待って、自分の名前と身分を告げた。

「あの店の女主人はもう五十に手が届こうというのに、うちの亭主を家に引き込んでいるんだよ」

何も訊かないうちに女はしゃべり始める。鼻が長くて口がとがり、興奮してくるとかささぎの顔そっくりになった。

「初めのうちは、うちの亭主が道を通るとき色目をつかうくらいだったのさ。そのうち声をかけるようになって。いくら自分が亭主に死なれた身だといっても、人様の亭主に気安く話しかけることはないもんだよ」

女は一気にまくしたてて、肩で息をする。

「それで、あなたのご主人は？」

私の質問が呼び水になった。

「その女があまりしつこいので、主人はろうそくを買い込むようになったのさ。そんなに要らないと言っても、切らすよりはましだからと言い訳をして買ってくる。ろうそくなどあたしは使いたくないのだけど、主人はあそここのろうそくは他の店と違って明るいと誉めるんだ。ろうそくの火を見るたびに腹が立つ。あまり腹が立って吹き消すこともある」

女は急にしよげ返り涙声に変わった。「もうろうそくは買わないでくれ。あたしが自分で他の店で買うからと主人に頼むのだけど、近くに店があるものをそういうわけにはいくまい。帰り道だから買うのも雑作ないと、聞き入れないんだよ」

「で、テレサさん、あなたはご主人に聞いたかったですか、店のおかみと何かあったのかと。それと

もあなたが現場をおさえたとか」

余りに話が長くなりそうなので、私は肝腎な点を質問する。

「現場なんぞ見つけられるはずもないさ。逢引きなどどこでもできるのだから。ろうそく屋が定休日のとき、主人がそわそわしているのが以前からおかしいとは気づいていた。本当に仕事場に行くのか、あとをつけたこともある」

「で、どうでした」

「ちゃんと仕事場までは行った。でも午前中は働き、早退してどこかで会うことも考えられるからね。あたしはずっと見張っていたかったけど、そうもいかない。自分は自分で昼間洗濯屋に出ているからね。主人には何回も問いただしたさ」

「何回も？」

「そう。夜中に、主人が寝ているのを起こして訊いた」

「それで」

「お前の勘ぐり過ぎだ、邪推だと言うばかりさ。本当のことが知りたいのだと、あたしは頼み込んだ。するとね、俺は眠たいのだとひどく怒り出した。それであたしはピーンときた」

「どんなふうにな？」

私は少々意地悪くなっていた。仕事でへとへとになって家に帰り、ぐっすり眠っているのを叩き起こされて、際限なく質問攻めにされる亭主も可哀相だ。

「主人はあたしがうとましいのだよ。訊くたびに短気になるのは、あたしを嫌っている証拠。そうだろうと念をおすと、違うと言う。お前を一番愛していると答える。だったらどうしてあんなことするのかと、あたしは声を張り上げた。ところが主人は何もしていないとまた白々しく否定するんだ。お願いです白状して下さいとあたしは頼み込んだ。もう白状するまで主人を眠らせないつもりだった」

彼女はいいよ熱っぽくまくしたてる。こんな調子で枕許で訊問されたら、どんな亭主でも逃げ出し

たくなる。

「するととうとう主人が本当のことを言ったのさ。お前の言う通りだ、もう寝かせてくれと。あたしは泣いたよ。泣いて主人の胸をかきむしった。主人は怒ってあたしを突き放し、ひとこと《馬鹿めが》と罵った。あたしはその夜一睡もせずに主人の寝息を聞いていた。

翌朝、主人にあのことをただと、馬鹿、方便で言ったまでだとまた嘘をつき、怒って仕事に出て行った。それで、あたしはあのろうそく屋の前で大声をあげ、洗濯棒でガラスを叩き割ってやったのさ」
彼女はやっとそこでひと息入れた。

もう充分だった。私はフォヴィル巡査の方を向く。

「で、亭主には知らせているのかい」

「朝早くから来て待っています。呼びましょうか」

「いや、その必要はない」

私は制して、机に戻った。記録簿を広げてペン先をインク壺に入れる。机の向こう側に坐っている女が怯えた眼でこちらを見ているのが分かった。

《病的嫉妬》

二つの単語を書きつけて、私はおもむろに視線を上げる。

「奥さん。あなたのためにこんなに朝早くから駆けつけて待っているご主人を疑ってはいけません。今回は大目に見ておきます」

「え、いいのかい」

心なしか、女の肩から力が抜ける。

「その代わり、もう一度ろうそく屋に狼藉を働いたときは、確実に精神病院送りになります。あなたがはいらなければならぬ病院はサンタンヌです」

サンタンヌという言葉に、女は一瞬首から上を震わせた。

「今回は入院を見合せるが、再犯の恐れ確実。その際は一八三八年法に基づく強制入院」
私はゆつくりペンを走らせた。

「テレサさん。割れたガラス戸の修理代は弁償するように」

重々しく言い置いてフォヴィル巡査に目配せをする。女はようやく礼を言い、足を突っ張るようにして出て行った。

嫉妬妄想に罹患した彼女も可哀相だが、向かいのろうそく屋の女主人も気の毒だった。ちょっとした普段の挨拶すら、亭主への横恋慕にとられてしまうのだ。いや、一番哀れなのは亭主かもしれない。否定しても責め続けられ、思い余って偽の白状をしようものなら女房に逆上される。八方塞がりなのだ。治療としては、法を破れば厳罰だと権威をもって脅かすことだが、嫉妬の炎が燃え立てば、その権威など大火の前の桶一杯の水でしかない。

私は扉の方をぼんやり眺めて待つ。無事放免された妻を夫はどんな顔で迎えているのか、頭のなかで思い描いた。妻のほうは夫の出迎えに礼を言い、これから先、ろうそく屋の女には一切ちよっかいを出さないでくれと夫に懇願するに違いない。夫はうんざりするだけで、まだ自分が地獄の中にいるのを確認せざるを得ない。存在しない事実が妻を操っているのに呆然とする。言葉を失って付き添う夫に、あの妻はどんな話をしながら家路に向かうのだろうか。

扉の音で我に返った。はいつてきた黒髪の女性を見て、私は思わず椅子から腰を浮かしかけた。胸の大きく開いた赤いワンピースは、胸や腰の部分がかき裂きになっっている。裾は泥で汚れ、足は裸足だった。

くすんだ肌色も汚れなのか日焼けなのか判然としなかった。しかし顔の造作は西洋人ものではない。小柄で、短軀のフォヴィル巡査よりさらに頭ひとつ低かった。

女は私を一瞥したきり視線を宙に浮かせ、口のなかでブツブツ呪文じみた言葉を発した。呪文をやめると、椅子の周りをぐるぐる回り出す。

ごらんのとおりですとでも言うように、フォヴィル巡査は女から少し離れて見守るのみだ。

女の黒い髪は縮れ毛ではなく、肩の付近で切り揃えられている。櫛が通っていないのでどんな髪型をしていたのかは判らない。一重瞼の目は東洋風で、唇の間からのぞく歯は若々しい。右の首筋に引っ掻き傷があり、細長く血糊が付着していた。胸元から汚れた肌着がのぞいている。どこか幼さを残した身体つきだった。

足首も細く、足そのものも小さかったが、五本の指が大きく開いている。しかも親指と第二指の間隙が広い。

私は記録簿に眼を落として女の名前を読みとった。

「オットー・ヤッコ？」

それまで宙に浮いていた彼女の視線がわずかに動いた。私は椅子から離れて彼女の傍に寄り、再度名前を呼ぶ。

「音奴」

初めて女の唇の間から声が漏れた。

「おとやっこ？」

私は反射的に復唱する。彼女が一瞬こちらを見て小さく頷く。

「ニッポン？」

咄嗟に私は口にしていった。どこがどう頭の中でつながったのか知らないが、〈日本〉という言葉が浮かんだのだ。彼女は私をもう一度眺め、また視線をはずした。

頬に涙がつたい、小さく肩を震わせる。私が近寄ろうとすると、自分の身を護るように床にしゃがみ込んだ。

両方の踵の上に尻をのせた奇妙な姿勢だ。表情を硬くして、斜め前の床の一点を凝視している。私は彼女の左腕を掴んで持ち上げ、手を放す。挙上した彼女の腕はそのまま動かない。

「おとやつこ。日本女性。十六、七歳か。カタレプシーを呈するカタトニー状態。フランス語は解さず。衝撃的な事件による心的消耗がうかがわれ、強制入院を要す」

それだけを書き上げて署名をする。彼女の腕は上がったままであり、フォヴィル巡査が物珍しい動物を見るように目を丸くしている。

「サントンヌ病院へ」

フォヴィル巡査に言つて診断書を手渡した。

フォヴィル巡査は壊れ物を扱う仕事で彼女の左腕に触れ、起立させる。音奴は立ち上がり、無表情で歩き出す。

扉が閉まるのを私は悄然と眺める。彼女が辿つてきた道筋が気になった。日本からはるばるに何をしにやつて来たのか。どこで働き、どうやつて放り出されたのか。そうでなければどこから逃げ出したのか。

いづれにしても休息を要する状態であるのは間違いない。それには今のところ精神病院が最もふさわしいはずだ――。判断が正しかったことを確かめて、いくらか安堵する。

フォヴィル巡査に三十分の休憩を告げて自分の部屋に戻った。ラバトー夫人が、温めたシヨコラを出してくれる。こちらの喉の渇き具合に合わせた濃さだった。

シヨコラを飲み干し、また地階の診察室に戻る。さらに三人の患者を診た。そのうち精神病院送りにしたのが二人だ。十二時半近くになって、四階にあるペロー警部の執務室の扉を叩いた。

「やあ、ジュリアン」

部下と立ち話をしていたエドモンは私に気づいてすぐに仕事を切り上げた。「俺が降りて行くのに。どうせ外で食べるつもりなんだ」

二人並んで階段を下るときも、すれ違った職員が敬礼する。私ひとりだと大ていは無視されるので却つてきまりが悪くなる。

「どこにする。ジャンの店かミグシスカ」

「ジャンの店はこの前行ったばかりだ」

「じゃミグシスカだ。ちよつと遠いが、いいだろう。午後も忙しいのか？」

「いや、午前中のほうが忙しい」

「そうか」

頷きながらエドモンは守衛に敬礼を返した。朝よりは気温がいくらか上がり、歩いているとフロックコートなしでも寒くはない。

キオスクの横で、焼栗売りが青い傘を広げて呼び込みをしていた。

「ジュリアン、お前、いったい一年間にどのくらいの人間を診察するのだい」

「平均して一日七、八人だから、一年間二千人かな」

「そうすると、お前があそこで働き始めて三年になるから、少なくとも六千人を診た計算だな」

「いや最初の頃は、ガルニエ先生がまだ元気で、俺よりは患者を多く診察していた。ま、それを差し引いても、四千人弱というところだろう」

私は改めて数の多さを実感する。サルペトリエール病院やサンタンヌ、あるいはビセートル精神病院に勤めていても、それだけの数の患者を診察するのは不可能だ。警視庁特別医務室の特徴は、一回きりの診察だけで、治療は全く要請されていないことだ。患者は右から左へと私の目の前に現れては去っていく。他の精神病院では、同じ患者は何ヵ月、あるいは年余にわたって治療しなければならない。一年に診る患者はせいぜい百人程度だろう。

「ガルニエ先生、だいぶ具合が悪いらしいな」

エドモンが暗い顔をする。

「今日も休まれた」

「もしものときは、お前が医長になるが、異存はないだろうね。あそこが気に入らなければ、無理には